	テーマ	主な内容
1	キリシタン史概要と前史	1549 年以前のキリスト教の影響を含め、キリシタン史全体を概観します。
2	ヤジロウとザビエルの来日	ザビエルが、マラッカでヤジロウと出会い日本宣教を志した経緯と２年強に亘る日本伝道の足どりを追います。
3	高山右近ら キリシタン大名	キリシタン大名が果たした功罪と、その中でも、特に影響の大きかった高山右近について学びます。
4	巡察師ヴァリヤーノと適応主義	日本に宣教に来たザビエルとその後継者コスメデトルレス神父や巡察師ヴァリヤーノが採った「適応主義」について学びます。
5	イエズス会の教育と信徒組織	未だ「日本語聖書」が無い時代に、どのように伝道し、教育をして行ったのかを学びます。
6	秀吉の伴天連追放令と迫害	秀吉の九州平定以後、突如、宣教師追放が告げられます。いったい、どんな理由があったのかを学びます。
7	鎖国と徳川幕府による禁教	キリシタンに対する組織的で徹底的な弾圧と、外国との交流を長崎の出島に限る鎖国政策に至った経緯を学びます。
8	潜伏キリシタンと高札撤去	九州長崎の一部や五島列島で、自分たちの信仰を隠しながら守り続けてきた「潜伏キリシタン」について学びます。

イエズス会の宣教方針「適応主義」Inculturation

ヨーロッパのキリスト教の習慣にとらわれずに、
日本文化に自分たちを適応させるという方法

16, 17 世紀の東アジアにおいて、イエズス会がきわめて大きな布教上の成果をあげるにあたってもっとも有効に機能したのが、ヴァリニャーノに代表される「適応主義」であった。しかし、ヴァリニャーノたちは、他の修道会のみならずイエズス会内部からの批判にも対抗しなければならなかった。（特に、仏教を規範とする方策などはイエズス会総会長からの警告をもかいくぐりながら貫徹されねばならなかった。）

後に、教皇ベネディクト 15世（1914-1922）がそれを是として以来、ローマ・カトリック布教の基本方針となった。

巡察師ヴァリニャーノと適応主義

- 初期　ザビエル⇒トルレス神父（20年間）
  ＜適応主義＞
- 第2期　布教長カブラル（37歳）
  ＜植民地主義的布教方針に転換＞
  ＊日本人蔑視、狭量
  ＊背教者を生む素地（不干斎ハビアン）
- 巡察師ヴァリニャーノ
  ＜適応主義に戻す＞

コスメ・デ・トルレス神父（Cosme de Torres, 1510年 - 1570年）

・スペイン・バレンシア出身
・若くして司祭となり、故郷を離れてメキシコに渡った。
・モルッカ諸島で、ザビエルと出会い、イエズス会入会。
・ザビエルとともに日本宣教に従事し、サビエル亡き後、日本宣教の責任者として走り回った。
・日本文化を尊重し、肉食をやめ、質素な日本食を食べ、日本の着物を着て後半生を過ごした。
・1556年には貿易商だったルイス・デ・アルメイダがトルレスの感化によってイエズス会に入会
・南蛮貿易の拠点として長崎（1570年）の開港に尽力した
・トルレスが日本に来たとき、1人の信者もおらず、1つの教会もなかったが、彼の死去時には京都、堺、山口、豊後、肥前などに多くの教会と多数のキリスト教徒が生まれていた。サビエルの夢を実現させたのは盟友トルレスであった。

フランシスコ・カブラル

植民地主義的布教方針

・1570年、コスメ・デ・トルレスの後継者として日本に派遣された。
・前任者トルレスは日本においては身なりや服装がきちんとしていない人物は軽蔑されるという事実にかんがみて、宣教師たちにあえて良い服を着ることを奨励していたが、「日本においてイエズス会員が絹の着物を着ているのは清貧の精神に反している」と木綿の服を着るようにした。
・日本語を不可解な言語として、宣教師たちに習得させようとせず、日本人に対してもラテン語もポルトガル語も習得させようとしなかった。それは、日本人がそれらを理解し宣教師たちが話している内容がわかるようになると宣教師を尊敬しなくなる、という理由からだった。
・日本人が司祭になる道も閉ざしていた。

不干斎ハビアン

1583年、京都で母とともに受洗。高槻、大坂のセミナリヨで学び、1586年にイエズス会に入会して修道士となった。

自身の経験により『仏法』を著し、これより後はキリスト教を擁護し、仏教を批判する論陣を張った。護教論書『妙貞問答』（みょうていもんどう）を著す。

1606年には林羅山と論争し、当時支持されつつあった地球球体説と地動説を主張した。

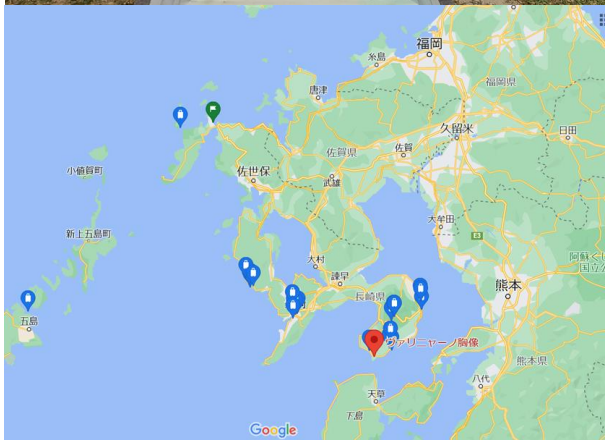
1608年、イエズス会外国人上長者への反発の末に、修道女と駆け落ちして棄教し、
1614年、長崎でキリシタン迫害に協力するに至った。
1620年、キリスト教批判書『破提宇子』（は・だいうす：「デウスを破却する」意）を著した。

イエズス会東インド管区巡察師
アレッサンドロ・ヴァリニャーノ

1579年（天正7年）、総長の名代として日本を訪れた巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノは、カブラルの宣教方針を完全に否定し、（カブラルが禁じた）日本人司祭の育成、日本布教区と本部との連絡通信の徹底、トルレスの適応主義の復活を指示した。

ヴァリニャーノはトルレスの日本文化尊重の姿勢を絶賛し、宣教師が日本の礼儀作法を学ぶことの重要性を指摘している。

カブラルはヴァリニャーノを逆に非難したが、結果として1581年（天正9年）に布教責任者の立場を解任された。

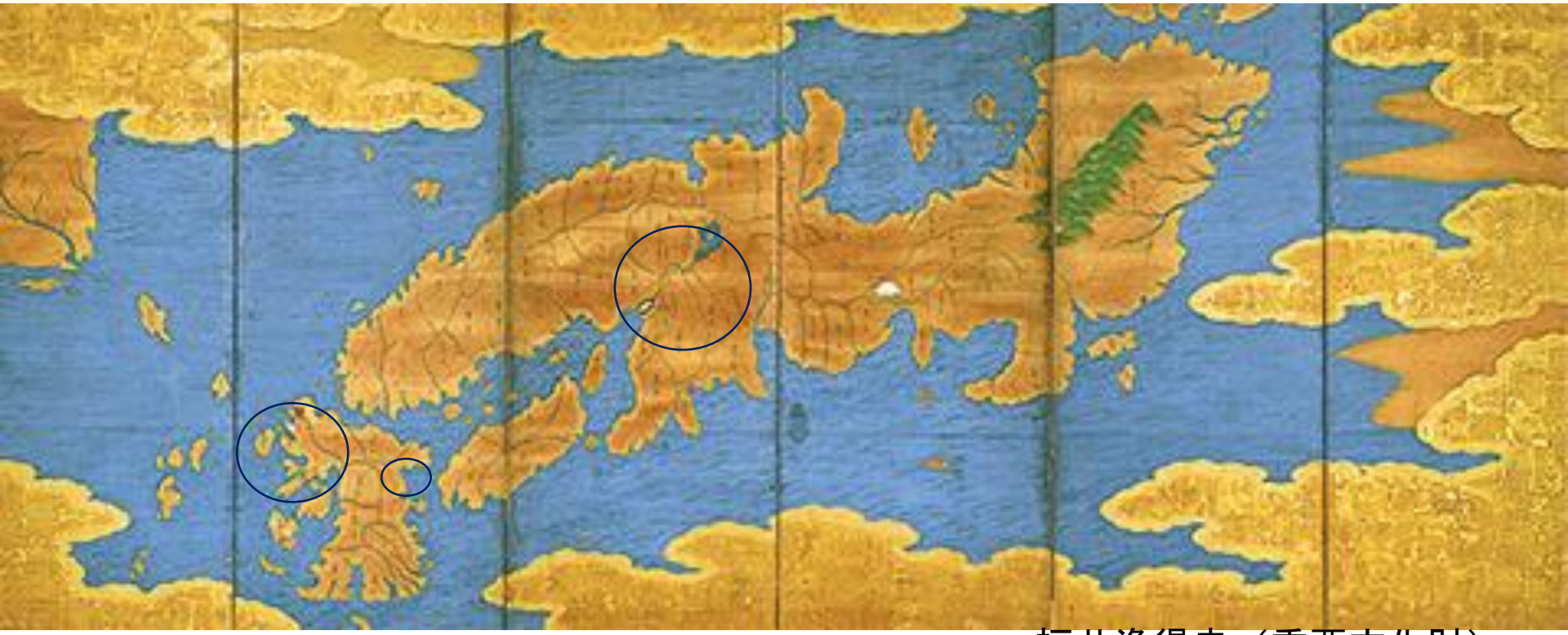


口之津

ヴァリニャーノの「適応主義」は、あくまでヨーロッパのやり方を押し通すフランシスコ会やドミニコ会などの托鉢修道会の方法論の逆を行くもので、ヴァリニャーノはこれを理由としてイエズス会以外の修道会が日本での宣教を行うことを阻止しようとし、後のイエズス会と托鉢修道会の対立につながることになった。

イエズス会員たちが日本社会でふるまうとき、社会的地位において同等であると見なす高位の僧侶たちのふるまいにならうべきであると考えた。高位の僧侶たちのように良い食事を取り、長崎市中を歩く時も彼らにならって従者を従えて歩いた。このようなやり方が「贅沢」であるとして日本のイエズス会員たちはヨーロッパで非難された。そのような非難は托鉢修道会からだけでなく、イエズス会内部でも行われた。

ヴァリニャーノ布教体制の確立



福井浄得寺（重要文化財）

日本を３教区に分け、教区長を配置

１、都（京都を中心に大阪。
　　畿内（山城、大和、河内、和泉、摂津）丹波
２、豊後（府内　大分）
３、下（大分以外の九州　主に長崎）

第二回総協議会（1590年）日本での布教方策の大綱

◆日本風の接遇方法や慣習・礼儀作法を尊重すること、その際における仏僧の華美な仕方を避けて清貧を厳しく遵守すべきこと（「諮問五」「諮問十」）

◆来日した宣教師に対しては一年間の日本語学習が義務づけられ、同時に日本人イルマンに対するラテン語学習も義務づけられた（「諮問十二」）

◆同宿をパードレとキリシタンとの仲介者として位置づけ、彼ら同宿が将来イルマンになって活動する存在として配慮すべきこと（「諮問十三」）

👉ヴァリニャーノの適応主義にもとづく布教の成果として、日本では16世紀半ばから17世紀半ばのキリシタン世紀に数十万人という驚くべき多数の信者が獲得された。信仰の真正性に疑問をなげかける研究もあるが、禁教と迫害に直面して、4万人とも5万人とも推察されるほどのキリシタン（その殆どは民衆層）が教義に殉じた事実は重視すべき。

「同宿」は、日本語で人々に説教を行ない 、キリスト教の教理を教え、 教会のいろいろな世話をし 、司祭たちのための文書の取り扱い（受信・発信）、 茶の湯の世話 、ミサや葬儀の式の手伝い、 客の接待等を行っ行った。彼らがいなければ、宣教師たちは、日本で、何事もなし得なかったであろう。

こうした 「同宿」 の中から、ふさわしいと判断され、本人も 「デウス ・ 神のみに仕え、献身していく」 と 神の前に 誓願 を立てていった人たちが、イエズス会に受け入れられ、「修道士（イルマン）」 と呼ばれ、新たな決意をもって、神に仕えて行った。

特に 説教 は「同宿」や日本人イルマンの仕事であった。聞く日本人たちも、彼らの説教の方を喜んだ。宣教師たちが自分で説教をするのは、彼らがいない時に、稀にする程度であった。

天正遣欧少年使節団の派遣（1582年～1590年）

中浦
ジュリアン

原マルチノ

伊藤マンショ
（主席正史）
大友宗麟の名代

千々石ミゲル
（正使）
大村純忠の名代

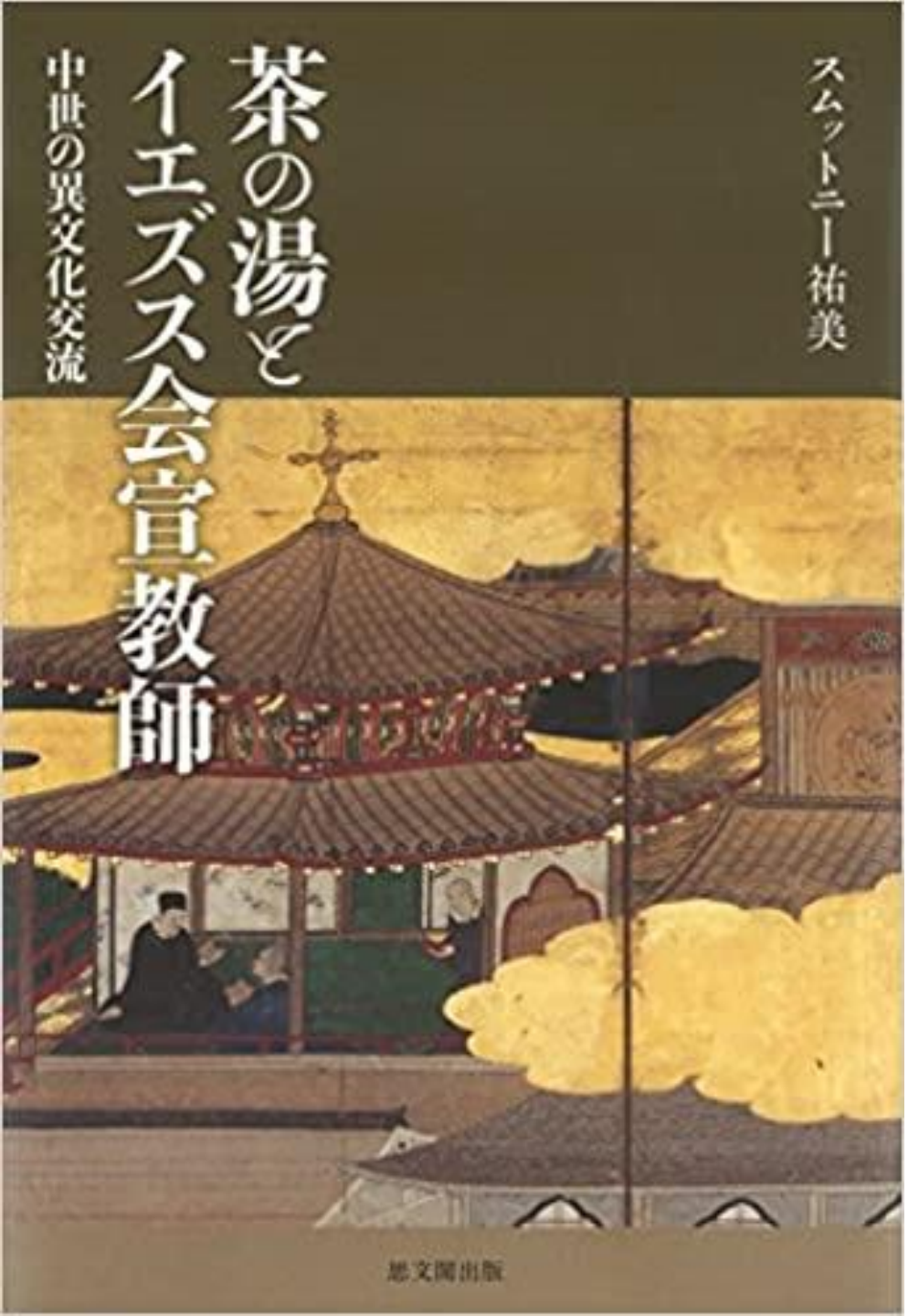
「日本島からのニュース」（京都大学図書館蔵）

👉使節の目的

1, ローマ教皇とスペイン・ポルトガル両王に日本宣教の経済的・精神的援助を依頼すること。

2, 日本人にヨーロッパのキリスト教世界を見聞・体験させ、帰国後にその栄光、偉大さを少年達自ら語らせることにより、布教に役立てること。

1582年、長崎港を出港し、マカオ、マラッカ、インド、喜望峰をまわり2年半かかってヨーロッパに渡り、ローマ教皇と掲見。1590年帰国。活字印刷機械などヨーロッパの進んだ技術や知識を持ち帰り、日本文化に貢献した。



イエズス会の適応主義
―茶の湯の活用―

ヴァリニャーノは、日本では茶の湯が客人に敬意を表すために用いる最高のもてなしであることを理解し、これを布教方針に採り入れて、日本人との友好的な交流関係を築いた。また、当時の主権者や領主たちから布教許可を得るために重視し、彼らの間で流行した茶の湯を日本イエズス会の指針や規則に盛り込んだ。

ザビエルらが、山口から堺まで、厳しい寒さ、小舟での狭い空間に耐えた。堺の有力な商人は、天竺からの旅の者と言われるみすぼらしい姿の外国人を見てかわいそうに思い、自分の知り合いで堺の有力な人物、日比屋了珪宛の紹介状を手渡した。十数年後、**日比屋了珪とその家族は、堺の教会を支える信者になった。**

日比屋了珪は、キリシタン宣教師の活動拠点として自宅を提供し（1561年）、献身的な支援の一方、**自宅にもつていた茶室を通して茶の湯の文化が堺で大成し、日本の武将や商人など富裕層の多くの交流の場として活かされていることを伝えた。**

千利休　侘茶

ヴァリニャーノと利休はそれぞれの立場において、茶の湯の精神性に注目した。聖職者であるヴァリニャーノにとって、茶室や露地、すべての茶道具を清め、その過程で自分の心を清めて、質素な食事をいただくというのは、新たな宣教方針を打ち出すための最適な日本の礼儀作法であったのである。

右近は、茶室を祈りの場、礼拝の場としていた。

利休七哲

- 蒲生氏郷・・・洗礼名レオン
- 細川忠興⇒細川ガラシャ夫人
- 古田織部・・・織部灯籠（切支丹灯籠）
- **高山右近**
- 芝山監物
- 瀬田掃部（かもん）書簡に名前
- 牧村兵部・・・キリシタン

7人中5名がキリシタンであった
と言われる
千利休自身も影響を受けた

Ⅰコリント9:20～23
ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人たちには――私自身は律法の下にはいませんが――律法の下にある者のようになりました。律法の下にある人たちを獲得するためです。律法を持たない人たちには――私自身は神の律法を持たない者ではなく、キリストの律法を守る者ですが――律法を持たない者のようになりました。律法を持たない人たちを獲得するためです。 弱い人たちには、弱い者になりました。弱い人たちを獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです。 私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みをともに受ける者となるためです。